

にちぎん

2021 NO.65

春



インタビュー 扉を開く

松尾 豊 東京大学大学院工学系研究科教授
進化する「人工知能」の可能性

地域の底力

宮城県本吉郡南三陸町
大震災の思いを胸に刻みつつ持続可能な未来を目指す宮城県本吉郡南三陸町

対談 守・破・創

森永卓郎 経済アナリスト・獨協大学経済学部教授

片岡剛士 日本銀行政策委員会 審議委員

「隣人を助ける原理」に基づいた小規模分散経済へ転換せよ

エッセイ “おかね”を語る

森田正光 気象予報士・お天気キャスター お金って、信用だと知った時

半世紀以上も前に読んだ本でタイトルも著者も忘れてしまいましたが、「女性は何故、口紅をつけるか」という内容はずっと覚えていて、それによると、太古の昔、人間がまだ狩猟採集で生計を立てていたころ、狩りをして得た肉を食べることは最大の幸福であり、自分の地位が高いことの証明だったそうです。したがって、肉を食べていない時でも、その地位を誇示するために、男女とも唇の周りに紅色を塗る風習が始まったというのです。

同様にネックレスやイヤリングなどの装飾品も、自分には余裕があることを他者に示し、自分の社会的地位が高いことを誇示する意味から始まったといえます。現代でも、バッグや装飾品にお金をかけるのは、太古の時代の「脳」が我々の中に連綿として生きているからではないかと思っています。

ただ、現代は太古の昔と比べて人々の社会的地位というか、立ち位置を示すものが多様化しています。昔なら単純にお金があるか無いかや、財産の多寡が重要だったかもしれませんが、インターネットが社会的に認知されてからは、SNSでの評判が「お金」の代わりのような役割をしています。

実際に、私の友人は、自分のツイッターのフォロワー数を増やすのに、フォロワーの人数が増えた分だけ、第三者に寄付するという方法でフォロワー数を増やしました。何の得があるの



絵・江口修平

お金って、信用だと知った時

森田正光

かと思ってしまうですが、実は一般的に、フォロワー数が多いほど社会的な信用度は増します。多くの人に「いいね！」ボタンを押される記事ほど信用度が高いと言い換えることもできます。

そこで「お金」です。若いころは、あまりお金のことを考えたことはありませんでした。そんな私が四一歳の時に、(財)日本気象協会を退職し、ウェザーマップという会社を立ち上げます。すると、これまで考えたこともない経理や税のこと、経営とは何かについても考えざるを得ない立場になりました。

そこで実践で学んだのは、「お金」って「信用」そのものだということでした。サラリーマン時代は、仕事をすればその対価は翌月に必ず支払われました。それは当たり前のことだと思っていました。会社側から請求をし忘れたり、新規の仕事の場合、約束通りの対価が得られないこともあり。こうした経験を通して、仕事を上で一番大切なのは「信用」で、お金はその「信用」にくっついていてるものだ認識しました。

個人にとっても、社会にとっても「お金」はとても大切なものですが、それはお金がいろいろなモノと交換できるからというだけではありません。お金が正常に回っていることは、人々が互いに相手を信用し合う平和な世の中である証明だと知りました。

もりた・まさみつ●気象予報士、お天気キャスター。1950年愛知県生まれ。財団法人日本気象協会を経て、1992年初のフリーお天気キャスターとなる。同年、民間の気象会社有限会社ウェザーマップ(現・株式会社ウェザーマップ)を設立。親しみやすいキャラクターと個性的な気象解説で人気を集め、テレビやラジオ出演のほか全国で講演活動も行っている。環境問題や異常気象についてのわかりやすい説明にも定評がある。





- 2 エッセイ／“おかね”を語る
お金って、信用だと知った時 気象予報士・お天気キャスター 森田正光
- 4 インタビュー／扉を開く
松尾 豊 東京大学大学院工学系研究科教授
 進化する「人工知能」の可能性
- 9 地域の底力——宮城県本吉郡南三陸町
大震災の思いを胸に刻みつつ
持続可能な未来を目指す宮城県本吉郡南三陸町
- 17 対談／守・破・創
森永卓郎 経済アナリスト・獨協大学経済学部教授
片岡剛士 日本銀行政策委員会 審議委員
 「隣人を助ける原理」に基づいた小規模分散経済へ転換せよ
 日本銀行のレポートから
- 21 「地域経済報告」(さくらレポート) —2021年1月—
- 22 「経済・物価情勢の展望」(展望レポート) —2021年1月—
- 24 FOCUS → BOJ 35 日本銀行情報サービス局 金融広報課の仕事
「人生100年時代」に向けて
 ～広めようお金の知恵、育もう生きる力
- 28 トピックス
福井事務所は移転しました ほか
- 31 AIR MAIL from Frankfurt
ベルリン空港物語

※本誌は3月3日(水)までの情報をもとに掲載しています。

表紙のことは

日本銀行広島支店は、明治三十八年(二九〇五)、出張所として水主町(現在の中区加古町)にて営業を開始しました。当時、当地では軍の機関が配置され、国庫金の出納事務が多かったことから、円滑な資金流通を図るために開設され、明治四十四年(一九一一)には支店に昇格しました。

表紙の初代店舗は、開設までの期間や物資、労力などの状況により、木造にて新築されました。本館、レンガ造り平屋の金庫および機械室、付属家で構成されています。本館は、木造モルタル仕上げの外壁に丸柱の列柱を配し、スレート葺きの屋根にドーム屋根とドーマ屋根(注)を配した石造り風の洋風建築でした。

その後、業務の拡大に伴い、昭和十一年(二九三六)に袋町の二代目店舗に移転するまでの三一年間、初代店舗は営業を続けました。現店舗は、平成四年(一九九二)三月、基町に三代目店舗として新築移転されたものです。開設以来一〇〇年以上の歴史を誇る広島支店は、これからも地元とともに歩みを続けていきます。

(注) ドーマ屋根…屋根裏の採光のために屋根面から突出して取り付けられた屋根窓。



表紙・画 北村公司

扉 INTERVIEW
開く



東京大学大学院工学系研究科教授

松尾 豊

MATSUO Yutaka

顔認証や車の自動運転など、「人工知能（注1）」の活用が身近な領域まで広がってきた。「ディープラーニング」と呼ばれる技術が大きく進展し、画像や音声の認識能力、判断の精度が向上したからだ。そうした人工知能の進化や人工知能研究で得た学びなどについて日本における人工知能の第一人者松尾豊東京大学（以下、東大）教授に語っていただいた。

進化する「人工知能」の可能性

少年時代に感じた「無限の可能性」

——かつて「人工知能(AI)」
というと、一九八〇年代の映画
『ターミネーター』(注①)で描
かれたように、「コンピューター
が高度な知性を得た末に人類を
滅ぼす」というような恐ろしい
イメージもあつたと思います。
松尾 私にとってコンピューター

は、最初に触れた頃から「無
限の可能性が秘められている」
と感じるものでした。小さい頃
はよくレゴブロックで遊んで
いたのですが、大きな作品をつ
くりたいと思っても部品がな
いとできません。でも、コン

ピューターでプログラミング
をして遊ぶようになると、一つ
の小宇宙をコンピューターの
中につくることができるとプロ
グラムで何でもつくれると気が
ついて、小学生ながら大きな
可能性があると感じたことを
覚えています。

中学生の頃は『月刊マイコン』
という雑誌を読んでいて、読者
向けの「宿題」もプログラムで
解いたりしていました。ある時、
「地理か歴史を選択できる社会
の試験で受験生の平均点にず
れが生じた。受験生の間で有
利・不利が出ないように補正せ
よ」というような宿題が出たん
です。二次関数などを用いれば
できるのですが、その頃習って
いたのは比例と反比例だけ。そ
こで、プログラムでシミュレー
ション的なことを行い、補正を
しました。それを応募したら努
力賞をもらえて、うれしかった
ことを覚えています。その頃か
らずっと可能性を感じていた
のだと思います。

——高校時代は受験勉強のか
たわら、哲学書を愛読されてい
たそうですね。

松尾 もともと哲学的なこと
を考えるのが好きで、例えば、
「今こうして考えている自分は

何者なのか」とか「死ぬとは何
だろうか」というような問いに
思いをめぐらせていました。そ

(注①)人工知能

(Artificial Intelligence = AI)

さまざまな定義があるが、松尾豊
教授は「人工的に作られた人間の
ような知能ないしはそれを作る技
術」と定義している。知的な振る
舞いを実現するために、入力(人
間が話しかける音声など)を受け
取り、出力(人間に答える音声など)
を出す。その入力と出力をつなぐ
途中の処理を人工知能が行う。

(注②)ターミネーター

一九八四年に公開されたアメリカ
のSF映画。二〇二九年の近未
来に人工知能の「スカイネット」
が反乱を起こし、人類はロボット
軍の攻撃によって絶滅の危機を迎
えるところから話が始まる。

うした思考の中で、「思考」や「認識」は人間の脳がつくり出しているわけなので、「知能」という存在に迫りたいと考えるようになったんです。AIの研究に興味を抱いたのも、コンピュータで人間の知能や脳の仕組みにまで迫るといふことがとても興味深いと思ったからです。

——顔認証や医療の画像診断、車の自動運転、音声認識できるスピーカーなど、最近のAIの実用例は「ディープラーニング（深層学習）」という技術の進展に由来していると言われます。松尾 AIには三回のブームが起きています。第一次は一九五〇年代後半から六〇年代。プログラムを使って推論・探索することで、特定の問題を解く研究が進みました。八〇年代の第二次ブームではコンピュータに「知識」を入れると賢くなるというアプローチから、実用的なエキスパートシステム（注3）が多くつくられました。

そして、二〇一〇年代以降の

第三次ブームの中心がディープラーニングです。ディープラーニングでは、プログラムで入力と出力の関係をモデル化する際、入力と出力を単階層の関数ではなく、「深い」階層の複数の関数を用い、「直列」につないで、それを一つの大きな関数のように扱うのです。複数の層での計算の過程で、対象物のどこに注目するか—これを特徴量（注4）と呼びますが—を自動的に獲得させることができるようになりました。

——特徴量を自動的に得られるようになったことがディープラーニングの最大の成果ということでしょうか。

松尾 その通りです。例えば、「しましま」は、「しま」のある「うま」ということは計算機には分かりません。「しま」や「うま」という意味を理解しているわけではないからです。そこで従来は、人間が、「しま」や「うま」がどういうものか、注目すべき点を特定し（特徴量を取り出し）、モデルとして入力すること、で、「しましま」を認識さ

せていたわけです。しかしこの方法では、一番大事な特徴量の特定を人間が行っています。人間を介さない特徴量が特定できないということが、従来のAIの唯一にして最大の課題でした。

しかしディープラーニングでは、先ほど申し上げた複数の関数を用いて、計算機が、対象物の何に注目したらいいか、つまり特徴量を獲得できるようになりました。まるで人間の脳のように、高次の概念を自ら認識できるようになり、また大量のデータによりその認識を調整できるようになったのです。実は、深い階層を持った関数を使うことは有望だと昔から言われてきました。計算機の性能が上がり、また大量のデータ

も入手して扱えるようになったことで、ディープラーニングが実現しました。入出力を深い階層でつなぐことで表現力の高いモデルが使えるようになり、画像診断や顔認証が一気に実用化しました。今後、ディープラーニングは、インターネットと同じように、社会の基盤になるだろうと思います。

（注3）エキスパートシステム

専門知識のない素人が専門家と同じような問題解決能力を持てるよう開発されたシステム。

（注4）特徴量

データの中の隠されたパターンのこと。ディープラーニングでは、特徴量を与えられていなくても、「AIが自ら学習し、獲得する」とされる。

「生命」に資する人間の「知能」

——画像診断や自動運転など、AIは身近になってきたと感じますが、さらに進化すると人間の知能を大きく超えてしまうと心配する議論もあります。

松尾 AIの分野に限らず科学技術の未来予測は非常に難しい。科学者として誠実な態度で答えるなら、「わかりません」というのが一番正しい答えだ



まつお・ゆたか ● 1975年香川県生まれ。97年東京大学工学部電子情報工学科卒業。2002年東京大学大学院工学系研究科電子情報工学博士課程修了。博士（工学）。産業技術総合研究所研究員、スタンフォード大学客員研究員、シンガポール国立大学客員准教授などを経て、19年より東京大学大学院工学系研究科人工物工学研究センター・技術経営戦略学専攻教授。専門分野は人工知能、深層学習、ウェブマイニングで、日本のAI研究の第一人者。人工知能学会では学生編集委員、編集委員を経て、10年から副編集委員長、12年から編集委員長・理事。14年から18年まで倫理委員長。17年より日本ディープラーニング協会理事長。19年からはソフトバンクグループ社外取締役も務める。一般向け著書に『人工知能は人間を超えるか——ディープラーニングの先にあるもの』（KADOKAWA）、共著・編著に『相対化する知性——人工知能が世界の見方をどう変えるのか』（日本評論社）、『超AI入門——ディープラーニングはどこまで進化するのか』（NHK出版）などがある。

と思います。
AIの進化を心配するとうのは、「知能」と「生命」を混同しているからではないでしょうか。飛行機は、人間が鳥を模してつくったものです。それが人間を襲うか心配する人はいません。しかし飛行機事故は起こり得ます。AIも同じです。それをどういうふうに使うかで事故が起こるかもしれません。生命ではないAI自身が意思や欲望を持って、人間に向かってくることはありません。

基本的には知能は生命にとつての「道具」なのです。空を飛べたり速く走れたりするのは同じように、「知能が高い」として利用して生存してきたのが人間であつて、知能が高いというものを工学的に実現できるようになること、それがAIの進化だと言えます。
——逆に言えば、AIを研究することは人間の知能を学ぶということですね。
松尾 そうだと思えます。AIを研究してきて一番の「学び」は、人間のこゝろや感情のこと——

がよくわかるようになったことです。人間の脳や感情は、進化的に設定されたものと、個体による学習の双方が非常に上手に仕組み、作動しているアルゴリズム（注5）なんです。たとえば人間は、腐ったものを食べるのは生存に不利になるので、「臭い」「苦い」と感じるように仕込まれています。逆に「おいしい」と感じるのは、自分の生存状態に有利だからです。これは長い進化の過程で、人間は自己保存のために獲得されてきたと言えると思います。

「人を助けたい」という気持ちも同じです。人間には角や牙といった強い武器がありません。でも高い知能を「仲間をつくる」という目的のために用いて敵と戦い、生き延びてきました。それは人間の生命としての

必要性に由来するものですか、「人に共感する」とか「困っている人を助ける」ということもできるのです。
人間の長い歴史の中で、生存を脅かす環境変化が何度も起こりましたが、人間はそれを利用して、生存に有利な形質を引き継いで現在に至りました。「共感する」や「助ける」といった進化に由来している人間のアルゴリズムは、AIのロボットに埋め込もうとしても難しいでしょう。これらの精巧な装置を人工的に作り出すことは困難です。人間というのは知れば知るほどよくできていると感じます。

（注5）アルゴリズム
問題解決の方法・手順。

「AIベンチャー」を輩出する研究室

——人工知能学会の倫理委員会が初代委員長を務められましたが、AIと倫理の問題についてどうお考えでしょうか。
松尾 AIは道具ですから、どう使うかが大事です。AIの悪用や軍事利用については議論していく必要があります。また



AIの社会への普及が進むと、これまで想定しなかった制度や人権に関わる問題が顕在化してくるかもしれません。採用活動に使うAIツールの開発に取り組んだ企業が一時話題になりましたが、ジェンダーや人種に対する偏見を示したために開発は中止となりました。人間が無意識に持つ偏向がAIで再生産された例です。また、アメリカのいくつかの都市で

は、プライバシーを過度に侵害する可能性があるという理由で顔認証が禁止になっていきます。AIをどう使うかだけでなく、AIという新しい存在から守るべき権利は何か、そういう議論も必要です。

—— 東大の大学院で運営されている「松尾研」は学生の起業家を輩出する異色の研究室です。松尾先生が自らの研究だけでなく次世代の人材育成にも力を注がれるのは、なぜでしょうか。

松尾 私自身が研究をベースにしながら、社会のほうを向いているからです。二〇〇五年から〇七年までスタンフォード大学に留学した時に、シリコンバレーの産業と大学の研究が結びついて技術革新を生む様子を目の当たりにし、大きな刺激を受けました。大学は研究と教育の役割があるわけですが、技術革新を創出するための役割も果たすべきだと考えるきっかけになりました。

松尾研では基本的に、国からの助成金をもらうことなく、

企業との共同研究をベースに運営をしています。企業からなるべく多くの資金を拠出していただけるように、価格設定をしっかりと、そのうえで常に期待を上回ることをやらないといけません。そういう緊張感は、どの松尾研ベンチャーも強く持っています。設立当初から投資に頼るといふことではありません。初年度から黒字が多いのが松尾研ベンチャーの特徴です。

—— 松尾研の目指しているところについてお聞かせください。

松尾 江戸末期の教育者吉田松陰が作った松下村塾では、短期間のうちに、その後活躍することになる人を多く輩出しました。そうした存在になりたいなど、研究すること、それを社会に出していくために現実に対応すること、その二つのバランスを松陰はいつも見ていたらしいです。そうした志や姿勢は松尾研も共通する部分があるかなと思います。

加えて大きいのは、学生たちが優秀なこと。火がつくと、東大生たちはすごい力を発揮します。勝手に学んで勝手に成長していきます。私は「すごいね、がんばれ」と言うだけで、何をしているわけでもないんです。

日本の産業界はAIも含めてデジタル化を標ぼうしているはずですが、大企業が若い人をたくさん採ってそれを進める、というのはなかなか難しいのが実情です。だからこそ、創業間もないスタートアップ企業がそこを担わないといけません。松尾研からもそうした企業を立ち上げ、支える人材を多く輩出し、日本の産業界を強くしようと。そうしたことに取り組むのも、東大をはじめ大学の使命なりつつあると思っています。

—— ますますのご活躍を期待しています。本日は、貴重なお話をありがとうございました。

※本インタビューは昨年十一月二十五日(水)に行われたものです。

(聞き手／情報サービス局長 林新一郎)

地域の底力

宮城県本吉郡南三陸町

大震災の思いを胸に刻みつつ 持続可能な未来を目指す 宮城県本吉郡南三陸町

東日本大震災から一〇年。
津波により甚大な被害を受けた
宮城県南三陸町は今、
記憶を大切に語り継ぎながら、
自然と共生していくための
あらたなまちづくりを着実に進めている。

南三陸町の中心部。その中心にある「南三陸町震災復興祈念公園」は、被災者の追悼と鎮魂、震災の記憶の継承、そして復興を祈念する場として、2020年10月に全体開園した。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

震災の夜の 決意を礎に目指す 持続可能なまちづくり

宮城県北東部、太平洋に面した南三陸町は二〇〇五年に旧志津川町と旧歌津町が合併して誕生した。その時から今まで一五年にわたり町長として町をけん引してきた佐藤仁氏は、一〇年前のできごとをこう語る。

「早く一体感のある町をつくりたいというのが、合併後の私たちの思いでした。四年の歳月を経て

新町建設計画がようやく八割程度まで進んだときにみまわれたのが東日本大震災です」

二〇一一年三月十一日、十四時四十六分に起きた震度六弱の大地震の後、南三陸町は高さ約一五メートルの津波に襲われる。町役場の防災対策庁舎で陣頭指揮を執っていた佐藤氏は五〇名ほどの職員らとともに屋上に避難し、アンテナや階段の手すりにつかまりながら何度も波をかぶった。その中で最終的に防災対策庁舎に残ったのは、わずか一〇人。南三陸町



は明治時代以降に限っても四度の津波を経験し備えはあったが、今回はその経験と想定をはるかに上回る規模だった。寒さに震えるなかで迎えたその夜。抛り所となったのは、奇跡的に濡れなかつ

(写真提供：南三陸町)



南三陸町と気仙沼市の境界に位置する田東山は、太平洋を望める山頂に奥州藤原氏との関わりが推測される11基の経塚（経典を土中に埋納した塚）が残り、5月中旬にはつじが咲き誇る。

(写真提供：かとうまさゆき写真事務所)

た一本のライターと数本のたばこ、そして流れてきたネット入りのミカン五個だったと佐藤氏は振り返る。

「ライターで火をおこし、生き残った一〇人で半分ずつミカンを分けて食べ、私を含む五人でたばこを回しのみしました。私の震災の原点、復興一〇年の歩みの始まりは、真っ暗闇の中で凍えていた防災庁舎の屋上なんです。自分たちは生き残ったのだから南三陸再生のために頑張ろうと声を掛け合ったあの夜が支えになり、この一〇年間、全身全霊で復興に取り組んできました」



10年が過ぎた今、南三陸町役場では震災後に採用された職員が4割を占めると話す町長の佐藤仁氏。記憶を風化させることなくいかに先々へと伝えていくかを考えているという。



2017年3月にオープンした「さんさん商店街」は、南三陸町志津川地区復興のランドデザインを担う建築家隈研吾氏が設計、デザインを手がけた。地元産の南三陸杉を使った6棟の建物に約30店舗が軒を連ね、週末には多くの人でにぎわう。左上／南三陸町内の飲食店のなかで、人気の的は、地元の旬な海の幸をふんだんに使った、見た目と味で二度楽しめる「南三陸キラキラ丼」。(写真提供：南三陸町) 左下／町内に複数見られるモアイ像は、1960年のチリ地震津波の被害を経て友好関係を築いてきたチリから復興のシンボルとして贈られた。



人口約二万七六〇〇人のうち、死者六二〇人、行方不明者二一一人。町全体の六割にあたる三三二一戸が全半壊する甚大な被害を前に佐藤氏が掲げたのは、二度と津波で命を失わない町、そして

持続可能なまちづくりという二つの大きな柱だった。

「毎日遺体安置所で手を合わせながら、二度とこの地獄を将来世代に味わわせてはならないと思い、震災直後の四月には職住分離を決断。七月に副町長と手分けしての説明会を、一週間で二三回行い、住民の皆さんの理解を得て、住居を高台に、商店街や工場は中心地に、という復興計画を策定しました」

高台への住居移転計画は二〇一七年に完了し、仮設住宅も二〇一九年には解消された。

「さらに未来を見据え、持続可能なまちづくりを標ぼうしてきました。南三陸町は分水嶺に囲まれていて、町に降った雨は全て町に流れ、志津川湾へと注がれます。まさしく山と川と里と海が一体になっている町です。この恵まれた自然とどう共生していくかということも、震災を経て一層真剣に考えました」

現在、建築家隈研吾氏のランドデザインにより、町の中心部は

南三陸町震災復興祈念公園と南三陸さんさん商店街をつなぐ中橋も、商店街同様に隈氏がデザインし、2020年10月に開通。南三陸杉を使い、やわらかに景色に溶け込んでいる。



まちの景色が変わるなか 震災の記憶を 人々に伝えていく

二〇二〇年十月完成の南三陸町震災復興祈念公園を要に整備が進み、あたらしい商店街が家族連れでにぎわう穏やかな日常が戻りつつある。南三陸町防災庁舎ほか九件の建物が災害遺構として残された。その町を囲むように海と山がある風景には、一〇年前の面影はほとんどない。

そんな状況でも、大震災の記憶を受け継いでいく地道な努力が重ねられていく。そのひとつが、南三陸ホテル観洋の震災を風化さ

せないための「語り部バス」だ。二〇二二年二月一日にスタートして以来、コロナ禍の影響があった一時期を除き、毎日催行。「のべ四〇万人以上にご利用いただきました」と話すのは、同ホテル第一営業次長兼企画課長で、自らも被災者で語り部として震災を語り続ける伊藤俊氏だ。

語り部バスの所要時間は六〇分。バスでまわる場所は大きな被害があった所だが、工事中や更地がほとんどで、過去の状況を知らなければ、そのまま通り過ぎてしまいかねない。語られて初めて、当時の様子がまざまざとよみがえってくる。宿泊客の避難に専念した震災発生時や被災した自宅の

南三陸ホテル観洋の「語り部バス」で語り部を務める、第一営業次長兼企画課長伊藤俊氏。自社所有の大型バスで被災場所を案内する。その活動は他地域との連携を生み、「東北被災地語り部フォーラム」やシンポジウムなども開催されるように。



その縁を契機とした講演先で、関係者から言われたことが、伊藤氏の心境を大きく変えたそうだ。

「まず生き残ること、生き残ったら生き延びること、生き延びたらそれを次に生かすこと。そう聞いて以来、経験談だけではなく、それを次に生かすために、何をどう伝えるべきなのかを考えるようになりました。日々町の風景は変わり、実感をもつてあの時を振り返っていたのは容易ではありませんが、また来ますと言われると、その方に何かを刻むことができたかなと思いますね」

修学旅行生の参加も多い語り部バスのなかで伊藤氏は最後に必ず、手を合わせてその温もりについて語る。

「あの時何度も安置所へ行った私たちは、冷たい手を知っています。手をつなげば、本当は温かいはずなのに。人間関係が次第に希薄になっていく時代だからこそ、とりわけ子どもたちには手のぬくもりを知ってほしいし、命の大切さと向き合ってほしいと思っています」

様子など、自身の経験も交えながら、何が起こり、その時どう思っていたのかを丁寧に説明する伊藤氏の言葉のひとつひとつが胸に深くしみた。

この語り部バスが生まれた発端は、電気や水道が復旧し始めた二〇一一年の夏からボランティアや視察の宿泊客が増え始め、その方々をホテルスタッフが案内した事だった。

「この町で何が起こったのか知りたいというお客様が少なからず

おられました。ただ、道も変わり、標識もないなか、そうした方々がどこに行つていいかわからない様子でした。ホテルのスタッフがその案内役を申し出たのが、語り部バスのきっかけです。かつての町の姿を、地元にいる自分たちが情報発信すべきだと頭では分かっていたのですが、最初のうちは涙がこみあげて話せなくなることもしばしばでした」

語り部バスの活動はやがて、全国の被災地との連携につながる。

漁師の生き方が変わった 持続可能な 養殖の取り組み

津波が変えたのは、陸の景色だけではなく。町の南、カキを主軸とする養殖が行われていた戸倉地区でも、養殖道具の全てが流された。しかし現在、カキの一経営体当たりの売上金額に関しては震災前より約七〇%増えていると話すのは、宮城県漁業協同組合志津川



右／南三陸町旧防災対策庁舎。震災の記憶を未来に継いでいる。左／南三陸町震災復興祈念公園内の「名簿安置の碑」には、東日本大震災の犠牲者・行方不明者の名簿が保管されている。



地元で長年親しまれてきた「サンオーレそではま海水浴場」は東日本大震災により大きな被害を受け閉鎖されていたが、2017年夏に復活。海水浴場から歩いて渡ることのできる荒島には、漁業関係者の信仰を集める「荒島神社」が立つ。

その昔、人々の争いに怒る神が割ったという伝説が残る「^{かみわりさき}神割崎」は、2月中旬と10月下旬頃、岩の間から日が昇る絶景が見られる。



支所戸倉出張所カキ部会長の後藤清広氏だ。
「震災前は、いわゆる過密養殖でした。量をかせごうとカキの養殖^{いかだ}をどんどん増やした結果、カ

キの成長は遅くなり、品質も落ちていったんです。問題意識は持っていました。漁師が所有する筏の規模がそれぞれに違う中で次の一歩が踏み出せない。それどころか、筏の数が増え、さらにカキの育ちが悪くなる悪循環に陥っていました」
津波で筏が失われた後、後藤氏が目指したのは、自然と共生する持続可能な養殖だ。筏の既得権を白紙に戻すことから議論すべく、部会では何度となく話し合いが重ねられたという。

「将来のためには持続可能な漁業に転換する必要があると強く思っていました。しかし、筏の数を減らすことは収穫量に響きま

す。誰しも怖い。とはいえ、小さな町で生活圏は皆一緒ですから、本音でぶつかって腹を割って話せる土壌があります。議論で険悪になったとしても、海の上では何かあったときに助け合わないといけない仲ですから。最終的には、全員の理解が得られました」
二〇一二年に立ち上がった、三年間限定の国の「がんばる養殖復興支援事業」が背中を押し、二〇〇人を超える漁師が挑んだ。あたたかな取り組みの礎になったのは、海の区画を整理した設計図。曖昧だった筏の配置を、細かく図面に表したという。

「震災前は五〜一五メートル置きだった筏間の距離を四〇メートルまで広げました。その結果、これまでよりも大粒のカキが、従来より二年近くも早く、一年足らずで育つようになりました。筏の数は減りましたが、生産量は二倍、品質の向上により売り上げもアップ。加えて、四割のコスト削減、労働時間の大幅短縮を実現しました」
他に例のない改革は外部からも評価され、二〇一六年には「責任ある養殖により生産された水産物」であることを示す養殖の国際エコラベル、ASC認証を取得。

左／常識を覆す挑戦が美味なカキを生んだ。澄んだ甘みの味わいが人々を魅了する。下ノラムサール条約湿地に登録された志津川湾。絶滅危惧種で国の天然記念物指定の渡り鳥コクガンが豊富な海藻類を求めて同湾に飛来する。
(写真提供：南三陸町)



宮城県漁業協同組合志津川支所戸倉出張所カキ部会長の後藤清広氏。





左／青森県八戸市から福島県相馬市まで、太平洋に面した4県をまたがる全長約700キロメートルの「みちのく潮風トレイル」は復興プロジェクトのひとつ。南三陸町では約38キロメートルにわたり、自然のなかを行くトレイルが楽しめる。（写真提供：南三陸町）



下／仙台藩養蚕発祥の地として栄えた歴史の展示施設などがある入谷地区の「ひころの里」。

それによりこれまで縁のなかった先との取引が生まれ、安定した収入も得られるようになった。

さらにはU・イターンや新規就業者も増え、高齢者がほとんどを占めていた部会の平均年齢が、それまでの六〇代から四〇代になったと後藤氏は顔を綻ばせる。

「全国的に一次産業では後継者問題を抱えています。いいものをつくる環境があり、それが客観的に評価され、収入があれば、漁業をやりたいと思う若者が多い。カキ同様、人にとっても環境が大事故と教えられました。大震災は苦難の連続でしたが、これまでできなかった養殖方法の転換に踏み出すきっかけになりました」

二〇一八年には、絶滅危惧種を含む貴重な藻場として、養殖場を

ある志津川湾がラムサール条約湿地に登録された。

「かつては生産本位で自然に負荷をかけていましたが、まわりに配慮しながら皆で豊かになろうという意識改革が着実に進んでいます。たとえまた津波がきても、設計図がありますから、われわれは今なら数カ月で養殖場を復活できるんです」

あらたな ビジネスが生まれた山と 杉のブランド化

持続可能な取り組み。それは海だけではなく、南三陸町の約八割を占める山でも始まっている。江戸時代から林業を営んできた株式会社佐久の専務取締役で南三陸森林管理協議会に所属する佐藤太一氏は、その背景を語る。

「分水嶺に囲まれた南三陸町は、山を起点に川、里、海が全部つながっています。だからこそ、水質や土砂災害などに影響する山の状態はとても重要なんです。過去の大地震や大津波でも、山だけはほぼ無傷でした。この揺るぎない財



産を生かすことが、この町の持続可能性に必ず寄与する。震災後、林業関係者のなかで環境と将来をあらためて考えようという思いが強くなりました」

南三陸町の山を覆うのは、材質の強度と淡いピンク色の美しさが特徴の「南三陸杉」。江戸時代に伊達政宗がこの杉を求めたという逸話が残るほど昔から良質な木材として知られ、震災前からブランド化が進められていた。その山と杉の評価を高めるために二〇一五年に取得したのが、南三陸町と佐久を含む民間団体四社が管理する森林加工流通過程を対象にした、FSC[®] 認証。森林資源の持続可能な

林業と不動産業を営む株式会社佐久の専務取締役で、南三陸森林管理協議会のメンバーでもある佐藤太一氏（上）。山主、森林管理業、素材生産業、丸太の切り出し業など、分業が当たり前だった林業を見直し、写真の商品をはじめデザイン、製造の内製化を進めている。



（写真提供：南三陸町観光協会）

供給、環境への配慮、地域への貢献などがきちんと行われていることが認められての結果だ。

「以前から国際認証の取得に向けた機運はあったものの、盛り上げがれずにいました。震災を機に、皆が抱いていた危機感と、行政が掲げる持続可能なまちづくりの構想が、実際の国際認証の取得につながりました」

FSC[®] 認証の取得により、コーヒーチェーン、天然志向の入浴用品メーカー、アウトドアブランドといった環境問題への意識の高い

2011年4月の第1回より毎月行われている「復興市」後の参加者の集合写真。2020年4月以降は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、実施の有無をその都度検討している。(写真提供：南三陸町)



グローバル企業が南三陸杉に注目し、あらたなビジネスが生まれているそうだ。

「南三陸杉の質の高さだけではなく、正しい林業を行っているわれわれの活動の価値を評価してもらう形が生まれています。都市圏の大企業と田舎の山が、持ちつ持たれつの関係であるこの流れをより進めていきたいですね」

佐藤氏がさらに願うのは、幼い頃に昔話として聞いた森のイヌワシが、南三陸の森にふたたび戻っ

てくること。正しい林業、人にも動植物にもやさしい健やかな森づくりが、未来に向けて続けられている。

海の幸、山の幸 とともに歩む南三陸町 だからこそそのワイン

南三陸町では、あらたな産業も生まれている。そのひとつが、二〇一七年からスタートした「南三陸ワインプロジェクト」。二〇一九年に南三陸町の地域おこし協力隊として推進メンバーに着任してワイン造りに励むのは、南三陸ワインナリー株式会社代表取締役の佐々木道彦氏だ。



赤、白、ロゼのワインは現在、地元産を含む東北地方産のブドウを使って醸造。写真は海中熟成を経て、フジツボが貼り付いたボトル。

もともと静岡の大手楽器メーカー

カーで商品企画や新規事業開拓を担っていた佐々木氏だったが、復興支援で東北地方に通ううちにものづくりの経験をなんらかの形で生かしたいとの思いが募り、二〇一四年に仙台市に移住。その後、縁あってワインと関わるようになるなか、南三陸町とそのワインプロジェクトに興味をひかれていっ

たそうだ。

「南三陸町は、海も山も食材が豊富にあるのが印象的でした。この恵まれた食材にワインを組み合わせることで、地域のあたらしい

食産業がつけられるのではないかと、という可能性を感じました」

とはいえ、ワインという、この土地になじみのない産業を一から立ち上げることに、当初不安視する声は少なからずあったそう。そのため佐々木氏は、カキやホタテ、銀鮭など、旬の食材が味わえる地元の復興イベントに参加し、そうした食材と併せてワイン



醸造所(上)、ワインなどの購入ができるショップに加え、飲食スペース(左)も設けられた海の見えるワイナリー。



南三陸ワイナリー株式会社代表取締役の佐々木道彦氏。海辺に立つワイナリーは将来的に、地元の人と旅行者とのコミュニケーションの場になれば、と話す。



上／町のあちこちで今も復興に向けた工事が行われ、景色は日々、変化。下／伝統的な紙細工をモチーフに、南三陸町の景色やメッセージが描かれた「きりこボード」は、町内の複数箇所に展示されている。

を実際に味わってもらうことに努めたという。

「年配者のなかにはワインを飲んだことがない方も多く、私たちが造るワインのすっきりとした味わいはもちろん、地元魚介類との相性の良さを楽しんでもらううち、町の方の意識も不安から期待に変わっていききました」

二〇一九年には、同プロジェクトの初めての商品「DELAWARE 2018」が「日本ワインコンクール2019」で奨励賞を受賞。公に実力が評価され、地元でのぶどうの栽培が拡張されるなか、二〇二〇年十月には醸造所に併設した飲食スペースのあるシヨップをオープン。ワインと食のイベントも積極的に行っていききたいと語る



佐々木氏が大切にしているのは、ワイナリーのコンセプトでもある「南三陸のみんなとおいしくなりたい」という思いだ。

「地元の食材とのマッチングをイメージしてワインをつくっており、ワイン会ではお世話になってる漁師さんや農家さんが一緒に参加されることもあります。ワインと食が人と人、人と地域をつなぐ結節点となって、南三陸町から人の輪が広がっていけばうれしいですね」

南三陸町戸倉地区のカキ漁師と連携し、養殖筏を活用したワインの海中熟成も始めた。地上と比べ、熟成度合いが深まるというのが興味深い。ワインのおいしさとさまざまな取り組みに関心が集まれば、南三陸ワイナリーは将来的に、旅人と地元をつなげる場にもなることだろう。

未来の若い世代に託される あらたな取り組みと震災の記憶と

町長の佐藤仁氏は、町の現状をあらためてこう語る。



「海の国際認証（ASC認証）と森の国際認証（FSC認証）を併せ持っているのは、世界で南三陸町だけ。山、海の取り組み、そして新規産業。持続可能な町になるために、それぞれの分野で果敢にアクションを起こしているのが、今の南三陸町の姿だと思えます。自然環境と共生する町として種をまいてきたわれわれの後、次の世代がどう花を咲かせてくれるか。これからの南三陸町が楽しみです」

二〇二二年には、東日本大震災の伝承館として「南三陸311メモリアル」の開館を予定するなど、人々の記憶を受け継ぐ努力も重ね

震災後、ボランティアが中心となり雑木林を開拓して生まれた「海の見える命の森」。その頂には、二〇一九年にミャンマーの有志から贈られた「南三陸大仏」が立ち、志津川湾を見つめる（上）。また大仏のそばには、「伝えよ千年万津波でんでんこ」（津波でんでんことは「津波が来たら高台に逃げる」の意）と書かれた小さな石碑も立っており、東日本大震災の教訓を静かに伝えている（左）。



「南三陸町には豊かな自然があります。津波の被害にはあいました。豊饒の海は残りました。私たちはこの海、そして山とともに生きていきます」

佐藤氏に話を伺った翌朝、志津川湾の向こうから顔を出した朝日とその景色のあまりの美しさに見入り、胸に熱いものがこみあげた。何が起ころうとも昇る太陽のように、持続可能な未来を実現すべく、南三陸町はこれからも力強く歩み続ける。

※本取材は昨年十二月二日（水）、三日（木）に行われたものです。



「隣人を助ける原理」に基づいた 小規模分散経済へ転換せよ

昨年来のコロナ禍は、これまで日本が進めてきた効率性重視の社会経済体制の転機となりうる——森永卓郎氏はそう指摘する。一極集中の大都市が新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）拡大の直撃を受け、都市の経済活動に依存する地方が疲弊していく。そうした経済社会のあり方をどう変えていけばいいのか。かつて森永氏の下で働いた片岡剛士審議委員との対談で、新型コロナ後の社会像を熱く語る。



日本銀行政策委員会 審議委員
片岡剛士
KATAOKA Goushi

1972年愛知県生まれ。96年慶應義塾大学商学部卒業後、(株)三和総合研究所に入社。2001年慶應義塾大学大学院商学研究科修士課程修了。05年(株)UFJ総合研究所経済・社会政策部主任研究員。06年三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株)経済・社会政策部主任研究員。16年三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株)経済政策部上席主任研究員。2017年7月より日本銀行政策委員会審議委員。



経済アナリスト・獨協大学経済学部教授
森永卓郎
MORINAGA Takuro

1957年東京都生まれ。東京大学経済学部卒業。日本専売公社(現・日本たばこ産業(株))、経済企画庁総合計画局、(株)三和総合研究所(現・三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株))などを経て、現在獨協大学経済学部教授。専門分野はマクロ経済、労働経済、計量経済。『年収300万円時代を生き抜く経済学』(光文社)、『なぜ日本経済は後手に回るのか』(KADOKAWA)、『グローバル資本主義の終わりとガンディーの経済学』(集英社インターナショナル)など著書多数。



エコノミストの役割は「一歩先」を示すこと

片岡 私は一九九六年に大学を卒業後、森永さんが在籍しておられたシンクタンクに入りました。内定の連絡は森永さんからいただきました。

『片岡さん採用です、細かいことは後で』と。すぐに切られたことを覚えていません。

森永 そうでしたか。私は覚えて

いませんが(笑)。とにかく当時はがむしゃらに働いていました。

片岡さんも入社早々から、鍛えられたんじゃないかと思えます。

片岡 当時、右隣の席に座る森永さんの視線をたえず感じながら仕事をしていました(笑)。「夜もふけてからが仕事の本番だ」という勢いで働いていましたね。働き方改革が叫ばれる昨今からすると隔世の感があります。

私自身、その頃を振り返ってみると入社して三年ほどで一五キロくらい痩せました。週末は平日の疲れを取ることに専念し、月曜になんとか会社に行くということの繰り返し。入社して最初の何年かは夢中で働くことが、その人の潜在能力の拡張につながるんだろうなと感じます。

ところで、森永さんや私がいるエコノミストの世界について伺いたいと思います。エコノミストの草分け的存在である高橋亀吉の言葉に、「変化を把握し、先行きを提示できる人こそがエコノミストだ」という趣旨のものがあ

ります。私が森永さんの下で働いていた時、他の方との違いという意味で感じていた点の一つは、森永さんはビジョンを提示される、ということだと思います。将来こんな社会になるとか、これから構造変化が起こるだろうとか。たとえば『年収300万円時代を生き抜く経済学』という著書を二〇〇三年に出版され、サラリーマンの平均年収は三〇〇〜四〇〇万円にまで落ち込むと予測されました。森永さんは、そうした世の中の一歩先を見通すオリジナリティーを持つていらつしゃる感じます。

森永 私は日本経済研究センターに一九八二年から八三年まで在籍していました。賃金と所得分配と食料品産業担当でしたが、それまでと同じように、ただ賃金の伸びの予測を出してもつまらないと思っていました。そこで、一人図書室にこもって「賃金構造基本統計調査」と格闘しているうちに、あることが分かりました。高度成長期に縮小していた格差が、石油ショック以降、また大き

く広がっていたのです。企業規模間や男女間だけでなく職業間、学歴間、職位間まで、ありとあらゆる格差が高度成長の終わりとともに拡大に向かっていました。日本経済研究センターは経済予測をする機関ですので、賃金構造を分析するのは本来の仕事ではないのですが、これは何だろうと疑問に思いました。私は、関係ないことに手を出すのが好きなんです(笑)。予測の報告書の編集権を握っていたので、自分が分析した賃金格差のレポートを、その報告書に入れ込みました。

片岡 そういう統計などから何かオリジナリティーを見出す観察眼が、他のエコノミストとは全然違うのかなと感じます。

森永 今申し上げた賃金格差については、仏経済学者のトマ・ピケティが、二〇カ国以上の税務統計データなどを二〇〇年分に取り観察して、その結果を『21世紀の資本』として刊行し、世界的なベストセラーになったことは記憶に新しいところです。私

は、彼よりも約二〇年早く、同じような作業をやったのですが、対象が日本だけで、期間も二〇年と短かった。もうちょっと拡大してやっておけばという気持ちはありますが、逆にピケティは、それだけ大規模に賃金格差を調べたところに独自性があると言えるのかもしれません。

また、いくら独自性のある良い意見を持つていても、さまざまなしがらみの中でそれを世の中に表明できないということもあります。私は昔から人と群れません。群れるとしがらみが生まれ、言うべきことが言えなくなってしまうからです。言うべきことを言える環境を自分で確保することも、この世界では大事だと思います。

マルクスが見通した世界 ガンディーが唱えた社会

片岡 昨年来、新型コロナの影響で世の中の雰囲気は一変しました。先ほどから話題に出ている格差についても、先行きを懸念する声があります。経済の先行きをど

う見ていらっしゃいますか。

森永 「K字回復」するだろうと見ています。その字のごとく、強いところは強くなり、弱いところは後退する。二極化です。ちょうど一〇〇年前、スペイン風邪の第三波に襲われた後の日本と同じような状況、すなわち、財務基盤が比較的強い大企業が、体力の相対的に弱い企業のマーケットに食い込み、中小零細企業は疲弊していく、という状況になることを懸念しています。

社会も、新型コロナの影響を受け変わっていくでしょう。事実、スペイン風邪がやった一〇〇年前の日本では庶民の暮らしが大きく変わりました。スペイン風邪がはやる前は、庶民はみんな着物を着て、半紙に筆で文字を書いていました。それが、スペイン風邪を境に、急速に服装が和洋折衷になった他、文字を書くのも、筆から万年筆や鉛筆になっていきます。万年筆のパイロットやトンボ鉛筆、スケッチブックのマルマンといった企業が創業したのは、こ

の大正期です。社会面でも、感染症を機に変化が起る可能性があると思います。

片岡 その変化のキーワードは何でしょうか。

森永 私は、「大規模から小規模へ」、「一極集中から分散へ」、そして「中央集権から分権へ」という三つのトレンドが生まれるだろうと考えています。戦後、日本は効率性を重視し、経済面では大規模化、一極集中を進め、また政治面では中央集権化を進めてきました。今回の新型コロナが、これまで進めてきたこうした流れを立ち止まらせているように思えてなりません。都市化、格差の拡大、環境破壊、こうした問題をこれ以上放置できない。まさにわれわれは岐路に立っているのではないかと。マルクスは、『資本論』において、資本主義が暴走し、地球環境と庶民の暮らしを破壊する経済の姿を憂えていた。それが最近、自分の中でふに落ちるようになりました。

地球環境と人の暮らしを守るた

め、これまで推し進めてきた「大規模・集中・集権」から脱却し、「小規模・分散・分権」の方向へ経済社会も生活様式も転換しないと、これから先、日本は立ち行かなくなるかもしれない。実際、一九九六年から二四年も続いていた東京圏への転入超過が、昨年五月から、同年六月を除き、転出超過となつています。潮目が変わりつつあります。

私は、その潮目の変化が「ガンディーの経済学」に基づく方向に向かえば、新型コロナ後の世界は、決して悪いものではないと考えています。インド独立の父と言われるガンディーが唱えたのは「近くの人が近くの人を助ける」という「近隣の原理」でした。大規模な工場を誘致しても、そこで働く人しかお金を得られません。それよりも、近所の人を作った農産物を食べ、近所の人を作った服を着て、近所の大工さんが建てた家に暮らす。そうすれば地域に雇用が生まれて、経済が回り始める。小さな経済の輪を広げることが、新型コ

ロナから脱却する切り札になる。私はそう信じています。

晴耕雨読の暮らしから 地域経済の輪ができる

片岡 ガンディーが唱えたような小規模分散型の社会への変化を促すために、国や自治体は何ができるでしょうか。

森永 そんな社会は夢物語と思われるかもしれませんが、実現しているところがあります。富山県の舟橋村です。この三〇年間で人口が倍増し約三千人が暮らしています。なぜ人口が急増したのか、村長さんに聞くと、「文化振興の政策を最優先にやった」と。例えば、人口の一割を収容できる大きなホールを建てた。過剰な箱物に見えますが、住民の教養レベルが高いので、文化的な催しをすると満席になるのだとか。私も舟橋村に講演に行きましたが、びっしり満員で、講演の後の住民の皆さんからの質問や問題意識の質は非常に高い。他にも、とてつもない蔵書数を誇る図書館を建てました。

そうした文化振興政策と並行して、村は耕作放棄地を借り上げてサラリーマン世帯などに貸し出す政策もしました。しかも単に貸し出すだけではなく、プロの農家の指導つきです。多くの住民は車で一五分の富山市まで働きに出ています。そして、自宅に帰って農作業で汗を流し、雨が降ったら図書館で読書にふける。文字通り晴耕雨読です。村にすれば、都市で稼ぐ人たちが、自然豊かな生活環境の中でずっと住み続けてくれるから、とくに産業がなくても経済を十分回せるんです。

片岡 森永さんご自身、都心から離れたところで暮らし、野菜作りなどをしておられます。実際の農作業のご経験も踏まえ、個人主体でも生産や消費の小規模分散化を図ることができると思われませんか。
森永 日本の農業について言えば、これまで大規模化一辺倒でしたが、私は「自産自消」を生活の中に組み込んでいくことを考えた方がいいと思っています。それぞれ

れの家庭で自分の食べるものは自分で作る、という生活様式です。野村総合研究所の予測によれば、二〇三五年に全国の空き家率が三〇%を超えると。そうすると、日本人は今よりもかなり広い家、あるいはこれまで家があったところを畑にするということが可能になるということです。その結果、庭付きの家ではなく、「家の前に畑がある」という生活を標準型として考えることもあながち夢物語ではありません。

私は三〇坪ほどの畑を借りて農作物を作っています。農作業は本当に大変ですが、そうして自産自消すれば、自分で自分が作ったものを食べられる喜びが得られるだけでなく、災害のリスクにも強い。大地震に襲われても私の家族は全く困りません。畑を掘れば芋もニンジンも大根もあるので。 **片岡** 昔から森永さんは人生を楽しんでおられましたか、今のお話もつながっているように感じます。

森永 ワクワクドキドキしながら

生きる、そのベースの中で楽しいことができればいい。自分で農業をやって実感しています。ただし、楽しい仕事はお金になりません。農業では一円も稼いだことがありませんし、実は童話作家になる夢も抱いて企画を出版社に送り続けていますが、箸にも棒にもかかりません。自分で経営する博物館に至っては大赤字です。それでも、いろいろ挑戦することは、やはり楽しい。自分で作った物を食べ、近くの人と助け合い、楽しいことに打ち込む。私が実践しているそういう生き方が、コロナ後の一つの方向性ではないかと思っています。

片岡 コロナ禍はわが国を含む世界を支えてきたシステム・仕組みの脆さをあらわにするとともに、変革へのきっかけを与えているとも言えます。その変革を良いものにする必要がありますね。本日は有意義なお話、ありがとうございました。

※本対談は昨年十月二十一日(水)に行われたものです。



日本銀行のレポートから

「地域経済報告」（さくらレポート）は、日本銀行本支店等が、日頃、企業ヒアリング等を通じて行っている各地域の経済金融情勢に関する調査の結果を、年4回（1月、4月、7月、10月）の支店長会議の機会毎に取りまとめたものです。

*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。 <https://www.boj.or.jp/research/brp/rer/index.htm/>

「地域経済報告」（さくらレポート）

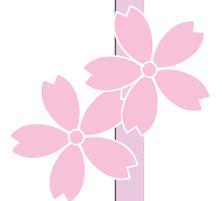
各地域の 景気判断の概要

— 二〇二二年一月 —

各地域の景気の総括判断をみると、多くの地域で新型コロナウイルス感染症の影響から「厳しい状態にある」としつつも、「持ち直しの動きがみられている」などとしている。ただし、足もとではサービス業を中心に感染症の再拡大の影響を指摘する声が聞かれている。

	【20/10月判断】	前回との比較	【21/1月判断】
北海道	新型コロナウイルス感染症の影響から引き続き厳しい状態にあるが、経済活動が徐々に再開するも、持ち直しつつある	➡	新型コロナウイルス感染症の影響から引き続き厳しい状態にあり、足もとでは持ち直しのペースが鈍化している
東北	厳しい状態にあるが、持ち直しの動きがみられている	➡	厳しい状態にあるが、持ち直しの動きがみられている
北陸	下げ止まっているものの、厳しい状態にある	➡	厳しい状態にあるが、持ち直しつつある
関東甲信越	内外における新型コロナウイルス感染症の影響から引き続き厳しい状態にあるが、経済活動が徐々に再開するも、持ち直しつつある	➡	引き続き厳しい状態にあるが、持ち直している。ただし、足もとではサービス消費を中心に感染症の再拡大の影響がみられている
東海	厳しい状態が続く中でも、持ち直している	➡	厳しい状態が続く中でも、持ち直している
近畿	新型コロナウイルス感染症の影響により、依然として厳しい状態にあるが、足もとでは、持ち直しの動きがみられる	➡	新型コロナウイルス感染症の影響により、依然として厳しい状態にあるが、全体として持ち直しの動きが続いている
中国	新型コロナウイルス感染症の影響から、厳しい状態が続いているものの、持ち直しの動きがみられている	➡	新型コロナウイルス感染症の影響から、依然として厳しい状態にあるが、持ち直しの動きが続いている
四国	新型コロナウイルス感染症の影響から、弱い動きが続いている	➡	新型コロナウイルス感染症の影響から一部に足踏み感もあるが、全体としては持ち直しの動きがみられている
九州・沖縄	持ち直しの動きがみられるものの、厳しい状態にある	➡	厳しい状態にあるものの、持ち直しつつある

(注) 前回との比較の「➡」、「➤」は、前回判断に比較して景気の改善度合いまたは悪化度合いが変化したことを示す（例えば、改善度合いの強まりまたは悪化度合いの弱まりは、「➡」）。なお、前回に比較し景気の改善・悪化度合いが変化しなかった場合は、「➡」となる。





日本銀行のレポートから

日本銀行は、1月、4月、7月、10月の政策委員会・金融政策決定会合において、先行きの経済・物価見通しや上振れ・下振れ要因を詳しく点検し、そのもとでの金融政策運営の考え方を整理した「経済・物価情勢の展望」(展望レポート)を決定し、公表しています。本稿では、2021年1月の展望レポート(基本的見解は1月21日、背景説明を含む全文は1月22日公表)のポイントを解説します。

*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。 <https://www.boj.or.jp/mopo/outlook/index.htm/>

「経済・物価情勢の展望」(展望レポート)

—— 二〇二一年一月 ——

二〇二〇～二〇二二年度の 中心的な見通し(図表1、2)

【景気】

新型コロナウイルス感染症の影響が徐々に和らいでいくも、改善基調をたどるとみられるが、感染症への警戒感が続くなかで、そのペースは緩やかなものにとどまると考えられる。特に、当面は、感染症の再拡大の影響から、対面型サービス消費を中心に下押し圧力の強い状態が続くとみられる。その後、世界的に感染症の影響が収束していけば、海外経済が着実な成長経路に復していくも、わが国経済はさらに改善を続ける予想される。

【物価】

消費者物価(除く生鮮食品)の前年比は、当面、感染症や既往の

原油価格下落、Go Toトラベル事業の影響などを受けて、マイナスで推移するとみられる。その後、経済の改善に伴い物価への下押し圧力は次第に減衰していくことや、原油価格下落の影響などが剥落していくことから、消費者物価(除く生鮮食品)の前年比は、プラスに転じていき、徐々に上昇率を高めていくと考えられる。

経済・物価のリスク要因

【先行きの経済・物価見通しの不確実性】

こうした先行きの見通しについては、感染症の帰趨やそれが内外経済に与える影響の大きさによって変わり得るため、不透明感がきわめて強い。また、上記の見通しでは、感染症の影響は、先行き徐々

に和らぎ、見通し期間の終盤にかけて概ね収束していくと想定していることに加えて、感染症の影響が収束するまでの間、企業や家計の中長期的な成長期待が大きく低下せず、金融システムの安定性が維持されるもとで金融仲介機能が円滑に発揮されると考えているが、これらの点には大きな不確実性がある。

【リスクバランス】

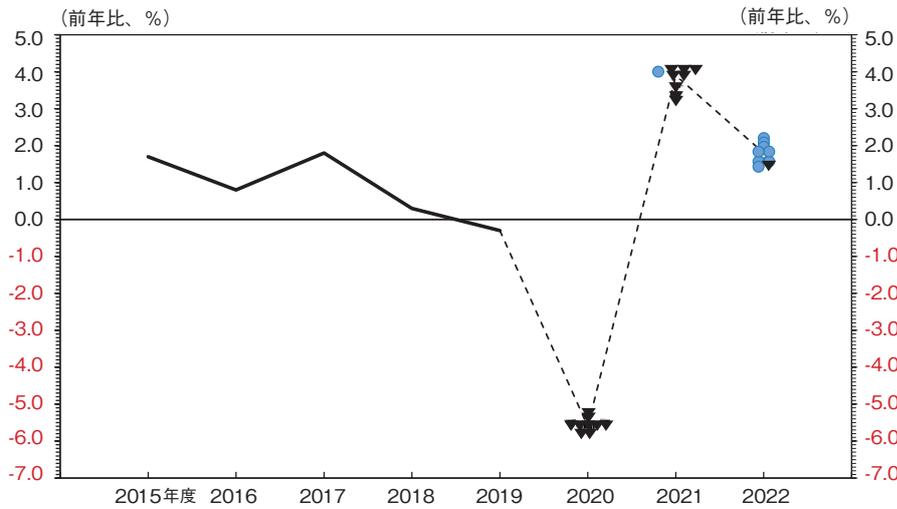
リスクバランスは、経済・物価のいずれの見通しについても、感染症の影響を中心に、下振れリスクの方が大きい。

金融政策運営

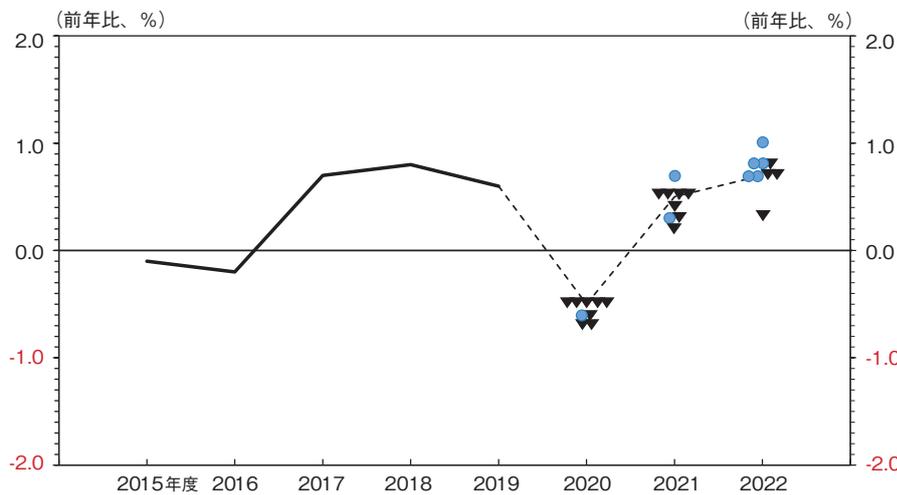
二%の「物価安定の目標」の実現を目指し、これを安定的に持続するために必要な時点まで、「長短

図表1 政策委員の経済・物価見通しとリスク評価

(1) 実質 GDP



(2) 消費者物価指数 (除く生鮮食品)



(注1) 実線は実績値、点線は政策委員見通しの中央値を示す。

(注2) ●、△、▼は、各政策委員が最も蓋然性が高いと考える見通しの数値を示すとともに、その形状で各政策委員が考えるリスクバランスを示している。●は「リスクは概ね上下にバランスしている」、△は「上振れリスクが大きい」、▼は「下振れリスクが大きい」と各政策委員が考えていることを示している。

(注3) 消費者物価指数 (除く生鮮食品) の2015年度については、2014年4月の消費税率引き上げの直接的な影響を除いたベース。

図表2 政策委員の大勢見通し

	実質 GDP	消費者物価指数 (除く生鮮食品)	(参考) 消費税率引き上げ・教育無償化政策の影響を除くケース
2020年度	-5.7 ~ -5.4 < -5.6 >	-0.7 ~ -0.5 < -0.5 >	-0.8 ~ -0.6 < -0.6 >
10月時点の見通し	-5.6 ~ -5.3 < -5.5 >	-0.7 ~ -0.5 < -0.6 >	-0.8 ~ -0.6 < -0.7 >
2021年度	+3.3 ~ +4.0 < +3.9 >	+0.3 ~ +0.5 < +0.5 >	
10月時点の見通し	+3.0 ~ +3.8 < +3.6 >	+0.2 ~ +0.6 < +0.4 >	
2022年度	+1.5 ~ +2.0 < +1.8 >	+0.7 ~ +0.8 < +0.7 >	
10月時点の見通し	+1.5 ~ +1.8 < +1.6 >	+0.4 ~ +0.7 < +0.7 >	

金利操作付き量的・質的金融緩和」を継続する。マネタリーベースについては、消費者物価指数 (除く生鮮食品) の前年比上昇率の実績値が安定的に2%を超えるまで、拡大方針を継続する。引き続き、

- ① 新型コロナウイルス対応資金繰り支援特別プログラム、② 国債買入れやドルオペなどによる円貨および外貨の上限を設けない潤沢な供給、③ ETFおよびJ-REITの積極的な買入れにより、企業等の資金

繰り支援と金融市場の安定維持に努めていく。当面、新型コロナウイルス感染症の影響を注視し、必要があれば、躊躇なく追加的な金融緩和措置を講じる。政策金利については、現在の長短金利の水準、

または、それを下回る水準で推移することを想定している。

(注) <>内は政策委員見通しの中央値。「大勢見通し」は、各政策委員が最も蓋然性の高いと考える見通しの数値について、最大値と最小値を1個ずつ除いて、幅で示したものであり、その幅は、予測誤差などを踏まえた見通しの上限・下限を意味しない。

「人生一〇〇年時代」に向けて く広めようお金の知恵、育もう生きる力

人生一〇〇年時代といわれる今、高齢化が進行し、キャッシュレス決済が広がるなど、私たちの日常を取り巻く環境や制度は大きく変化しています。また、国民の価値観やライフスタイルが多様化する中で、暮らしを守り、豊かにするために知っておくべきことも個々人によってさまざまとなっています。そうした状況下、人生に役立つ、お金にまつわる情報を広く発信し続けているのが、全国各地の金融広報委員会とその中央組織である金融広報中央委員会です。同委員会は、関係省庁や民間の金融機関・関連団体などと連携し、日々、中立公正な立場から多種多様な金融広報活動を行っています。今回はその事務局機能を担う情報サービス局金融広報課をご紹介します。

人生をより豊かにする 金融リテラシーの重要性

「金融広報中央委員会は、暮らしや人生に関わる金融広報活動を中立公正な立場から全国的に展開しています。日本銀行情報サービス局内に事務局を置き、関係省庁や金融団体、さらには四七都道府県の金融広報委員会と連携しながら、常に時代を先取りした金融広報活動を行ってきました」

そう語るのは、情報サービス局参事役（金融広報統括）で、金融広報中央委員会事務局

場にしたいという関係者の願いが込められているといいます。

「前身の組織も含めて、金融広報中央委員会が発足以来一貫して『国民一人ひとりの目線に立ち、暮らしに必要な金融知識をお届けしたい』という思いで業務に励んできました。それを形にし、時代に即した情報を提供するためには、金融技術の進展やライフプランの多様化などの

局次長も務める小泉達哉さん。同中央委員会では、現在、日本銀行の職員約三〇名が金融広報に関する業務を行っています。

前身となる貯蓄増強中央委員会の誕生は、今から遡ること約七〇年前の一九五二年。その後、日本経済は成長し社会が豊かになる中で、一九八八年には名称を貯蓄広報中央委員会に改め、さらに二〇〇一年には現在の金融広報中央委員会に変更されました。委員会の愛称は「知るぽると」。「知識（知る）

の港（ぽると）」を意味し、金融広報委員会を国民の役に立つ金融経済情報が行き交う

情勢変化に対して常にアンテナを高く張っておくことが大切です。私たちは、金融業界や全国各地域とつながった全国的な組織であり、各方面から多様な情報が入ってくるという強みがありますので、それを十分に生かしていきたいと思っています。

ただ、金融業界サイドの独りよがりの金融広報活動



「知るぽると」のロゴマーク



にならないようにしなければなりません。来る時代に、どのようなお金に関する知識や判断力を身に付ける必要があるかを的確に把握すべく、一九五三年に開始した「国民の金融行動に関する世論調査」をはじめとする幾つかの調査を実施し、それらの結果を私たちの活動に反映させています。こうした調査も重要な仕事です」

お金に関する知識や判断力は「金融リテラシー」と呼ばれます。なにやら難しいことのようにも思いますが、暮らしに直結した身近な内容であり、人生一〇〇年時代といわれる今、長い人生を実り多いものとするために金融リテラシーはより重要になっている、と小泉さんは話します。

「個人の資産形成を後押しするような金融制度や商品が拡充される中、金融に関する知識があつて、時間を有効に使えば——これを「時間を味方に付ける」とも言います——資産形成を通じて老後を含めた人生・生活設計に選択の幅が広がりますし、詐欺などの犯罪に巻き込まれるリスクを減らすこともできます。ただ、リタイアの時期や個々人の健康寿命、介護の問題など、年齢が高くなればなるほど人生設計をめぐる事情は千差万別となります。そういう意味では、国民の皆さまに一律の情報提供を行っている意味を成しません。金融広報委員会に求められるのは、国民各層・各年代が

直面する課題に目配りしながら、かゆいところに手が届くような情報提供を実現していくことだと思つています。それによって、国民の皆さまの実りある人生設計のお役に立てばうれしいですし、そうした存在にならねばと常に思つています」

情報を広く浸透させるための 各地域との深い連携

金融広報活動を全国で効果的、効率的に行つていくには、四七都道府県の金融広報委員会との連携が欠かせません。その各地域の金融広報委員会とのパイプ役やサポート役を担うのが、地域サポートグループ長の福山泰弘さんです。

「地域により文化や人の考え方は異なりますから、関係者と会い、意見交換をして

はじめて分かることは多い。そうした現場の声を的確に金融広報活動に反映していくことも必要です」

全国各地の金融広報委員会では、外部専門家に金融広報アドバイザーを委嘱し、お金に関するセミナーの講師として、学校や大学、自治体、公民館、市民団体などに派遣しています。その回数は約四三〇〇回のほり、その受講者数は約一九万人に至っています（二〇一九年度中）。そうした草の根型の活動を普及させるには、社会情勢や各地のニーズをくみ取り、これに応じた講座を提供していくという不断の努力が必要です。

「金融広報委員会が提供する講座や講演会は、ただ『面白かった』と喜んでもらうだけで終わつてはいけません。それを聞いた



オンラインでの講義の様子（工夫しながら実施）



大学での講義の様子（感染対策を徹底して実施）

人に気付きを促し、行動変容に結びつけることこそが成果です。知識を得たことで得をする人を増やすというより、知らないで損をする——人生をより実りあるものとするチャンスに気付かずにごまかしてしまう——人を一人でも減らしていきたいですね」

社会に出る前に備える
大学生向け金融教育

金融知識が必要なのは、高齢者や社会人だけではありません。若い世代に金融リテラシーを浸透させるために、金融広報課が行っている活動のひとつが、関連省庁や業界団体とともに講義を行う大学連携講座です。二〇二〇年後期は、計九校と連携した講義が進められています。その業務を取り仕切り、ときには教壇に立つのが、金融教育グループ企画役の酒井輝さんです。

「昨今、奨学金返還の滞納や国民年金の未納などが注目されていますが、このように大学生が関係するお金の問題は少なくありません。二〇二二年四月に予定されている成年年齢の引き下げが実施されれば、若年層向けの金融教育はますます大切になると思います」

酒井さんが最も心がけていることは、人生と深く関わる金融の話をするにあたり、聴講する学生の価値観を理解し、寄り添うこと。

「就職や結婚、ジェンダーの問題など、今の若者の価値観は一層多様化しています。学生の考え方を理解し、一方的な価値観の押しつけにならないよう心を砕いています」

二〇二〇年度はコロナ禍の影響でオンラ

インによる講義が行われていますが、結果的に多くの気付きがあったと酒井さんは話します。

「伝えるという点においては対面式講義が一番良いと思っていました。チャット機能を利用したオンライン講義では学生からの質問が増えました。対面より気軽に質問できると好評です。双方向性が高まり、講師と学生間のコミュニケーションが深まった面も出てきたと感じています。講義を聞いた学生の金融に関する判断力や行動力の向上につながるような講義内容にしていきたいと思っています」

その講義をより良いものにするための貴重な情報収集が、終了後のアンケート調査です。

「非常に勉強になった、役に立つ講義だった、という声を聞くと率直にうれいものです。ただごく少数ですが厳しい意見もあります。そういう意見にも常に耳を傾けつつ、講座を運営しています」

子どもたちが
社会の中で生きる力を得るため
お金の大切さを知ってもらおう

二〇一八年から順次実施されている学習指導要領の改訂にともない、就学前の段階から小中学校、高校まで、金融教育に対する関心が高まっています。その教育現場の

サポートを担う金融教育グループの早川裕子さんは、担当業務についてこう語ります。

「自分の生活や将来をしっかりと考えられる、いわば『社会の中で生きる力』を養うのが金融教育の大きなテーマ。学校では、金融教育を通して、ものを大切にするという生きる上での根本や、生きるためにはお金が必要であり、稼ぐためには働かなくてはならないことなどを、それぞれの年齢に応じて学びます」

ある小学校では、地元の特産品の野菜を自分たちで栽培し、地域のバザーで販売する取り組みが行われているそう。キャッシュレス化が進み、現金に触れる機会が昔より減っている中で成長していく子どもたち。お金への実感が持ちにくい世の中だからこそ、金融教育は重要性を増していくのではないかと、早川さんは言います。

「体験を通して、働くことの大変さや勤労から得たお金で暮らしていることを理解し、働くことやお金の尊さを感じるようになってほしい。また、バザーへの参加といった地域社会に密着した活動を行うことは、自分が住んでいる地域の良さを再認識する機会にもつながっていくと思います。こう



金融広報中央委員会が主催する各種コンクールの募集ポスター

した取り組みは、図らずも、コロナ禍で地方の魅力が見直されている最近の世の中の流れとも合っているのかもしれない」

子どもたちへの教育にとどまらず、先生向けの金融教育セミナー（二〇二〇年度はコロナ禍の影響でオンライン開催）や、中高生を対象としたお金にまつわる「作文・小論文コンクール」を開催するなど、活動は多岐にわたっています。

「作文・小論文コンクールでは、子どもたちの意外な発想に驚いたり、気付かされたりということが多くですね。キャッシュレスや特別定額給付金の話題など、内容も時代を反映していて、子どもたちの意識も変わってきていると感じています」

雑誌からインターネットまで 幅広い発信で金融知識の普及を推進

世代を超えてより多くの人に情報を発信し続けるための広報ツールの一つが、全国各地の金融広報委員会を通じて図書館、公民館や金融機関などに幅広く配布される季刊広報誌『くらし塾 きんゆう塾』です。その編集に携わる金融知識普及グループ企画役の石黒毅一郎さんは、お金や暮らしにまつわるさまざまな情報の提供について、記事によってはマンガを用いるなど分かりやすさにこだわっていると語ります。

「年代やライブイベントなどに応じて必



広報誌の取材の様子（ヴァイオリニスト：宮本笑里氏
（写真左））

要な情報は異なります。より多くの読者に関心を持ってもらえるよう、各号とも幅広いテーマを取り上げるように心がけています。例えば、相続法改正があれば、時機を逃さず紹介したり、最近ならコロナ禍関連の詐欺・悪質商法の最新事例を特集として取り上げるなど、お金や暮らしに役立つ情報を、世の中のニーズを読みながら掲載しています。読者から、有意義な内容だった、おかげで詐欺被害に遭わずに済んだ、などという声を頂くと、微力ながらも世の中に貢献できているようでやりがいを感じますね」

知るぼるとのウェブサイトで、広報誌だけでなくさまざまな情報を掲載していますが、最近では、若い世代にも注目してもらえよう、ツイッターなどSNSも情報発信のツールとして活用しています。

「いくらい情報を掲載しても、伝わらなければ意味がありません。より効果的に情報を伝えるためには、見せ方の工夫も必要です。ほかの媒体や電車の中づりなどが、どう伝えようとしているのか、という見せ方を意識して見るようになりました」

時代の変化を迫る金融広報中央委員会のアンテナのひとつ、「金融リテラシー調査」や「家計の金融行動に関する世論調査」などのアンケート調査の実施も、同グループが担う業務。長年にわたって蓄積した膨大な調査結果のデータは、マスメディアで報道されるだけではなく、大学などでの分析、研究に役立てられ、暮らしや社会に還元されています。

金融知識の普及に努める金融広報中央委員会の業務の特徴は、一般の方々と直接触れ合う機会が多いこと。教育現場から講演会まで、感謝の言葉が励みになるといいます。今後はeラーニングなど情報通信技術のさらなる活用が検討されていますが、現在でも『くらし塾 きんゆう塾』や知るぼるとのサイトで得られる情報は多々ありますので、ぜひ一度、ご覧になってみてください。人生を豊かに過ごすためのさまざまなヒントが見つかることでしょう。

（肩書などは二〇二〇年十一月時点の情報をもとに記載）

福井事務所は移転しました

▼福井事務所は、二〇二〇年十一月、福井銀行本店ビルの建て替え完了に伴い、一時入居先から移転しました。

▼福井銀行は、北陸新幹線の福井県内延伸による福井駅前の街並み刷新の先陣を切って、本店ビルの建て替えを行いました。同行本店ビル周辺は、西隣に北國銀行福井支店ビル（福井テラス）が新しく開業し、斜向かいに北陸銀行が構えるなど、福井県の新しい時代を表象する金融村の様相を呈しています。

▼福井事務所は、一九四六年二月の開設以来、「三八豪雪（一九六三年）」時の豪雪に伴う現金需要や、平成三十年（二〇一八）や令和三年（二〇二一）の豪雪時に発動された金融上の措置に対応するなど、地域経済活動を支え、本年二月には事務所開設満七五年を迎えました。

▼福井事務所の歴史を礎にし

福井事務所が入る福井銀行本店ビル



て、新たな一步を踏み出し、今後も地域と共に歩みを重ね、その一層の発展に貢献して参ります。

「金融庁検査・日本銀行 調査の連携強化に向けた タスクフォース」の 開催について

▼日本銀行は、「最後の貸し手」としての業務を適切に運営する観点などから、金融機関の業務運営や各種リスクの管理状況、

自己資本の充実度や収益力などを把握するために、調査やオフサイト・モニタリング（注1）を行っていきます。

▼近年、グローバル展開などに伴い金融機関の抱えるリスクが多様化・複雑化する中で、より質の高い調査やオフサイト・モニタリングの重要性が一層高まっています。

▼こうした認識を踏まえつつ、金融庁と日本銀行は、これまでも、わが国金融システムの安定確保という観点から、マクロ・プルーデンス（注2）、および、ミクロ・プルーデンス（注3）

の両面において、さまざまなレベルでの情報共有や意見交換を行うなど、連携を強化してきました。例えば、最近では、本邦金融機関による海外クレジッド投融資に関する調査や、LIBOR（注4）公表停止に向けた金融機関のLIBOR利用状況調査、共通シナリオに基づく一斉ストレステストの実施などを行ってきました。

▼こうした連携をさらに強化し、金融機関の負担軽減と、より質の高いモニタリングの実施に取り組んでいくために、昨年十一月二十日、金融庁と日本銀行は「金融庁検査・日本銀行調査の連携強化に向けたタスクフォース」の第一回会合を行いました。日本銀行では、このタスクフォースにおける意見交換などを通じ、金融庁との間で、データの一元化、検査・調査の計画調整や結果の共有、銀行免許審査・当座預金口座開設手続などにおける連携強化に取り組んでいます。

（注1）金融機関への立ち入りはせず、金融機関から提出された各種経営資料の分析や役員へのヒアリングなどを通じて行う調査。

（注2）金融システム全体のリスクの状況を分析・評価し、それに基づいて制度設計・政策対応を図ること。

（注3）個々の金融機関の健全性の確保。

（注4）ロンドン市場での金融取引における銀行間取引金利。LIBORは、London Interbank Offered Rateの略。

「決済の未来フォーラム セキュリティトークン 分科会」を開催

(二〇二〇年十二月)

▼日本銀行決済機構局では、二〇二〇年十二月八日に標記会合を開催しました。金融機関、プラットフォーム開発企業、業界団体、法曹関係者などの方々がオンラインで参加し、その模様がネットで同時配信されました。

▼冒頭、日銀 FinTech センター長は、①セキュリティトークン（注1）という新しい証券市場を巡る金融機関の取り組みを広く共有することおよび②決済インフラや市場創造の早い時期にこそ関係者間で将来展望を議論することの重要性を指摘しました。

▼金融機関のプレゼンテーションでは、ブロックチェーンなど新技術を活用することの利点が紹介されました。具体的には、①小規模調達や小口投資、動産（絵画等）などの非金融資産の

証券化など、これまでにない商品性の実現、②企業の製品・サービスの利用権への展開、③証券投資に関連する広範な業務の自動化・コード化（いわゆるプロگرامマブル性の活用）、④国境をまたぐ資金調達や証券投資への展開、などです。

▼その後の討議では、新市場の誕生期には低い市場流動性や公正な価格の発見という観点から、証券会社などマーケットメイカーの役割が重要という見方が示されました。また、長期的に市場の厚みが増してくれば、相対取引、銀行間取引、私設取引システム（PTS、注2）、分散型取引所（DEX、注3）といった、取引の多様な発展性がありうるとの指摘もありました。

▼そのほか、新技術がもたらす証券・資金決済インフラの可能性について、まずは市場創造に向けた機運を盛り上げながら、協調領域のあり方や投資家・調達企業のリテラシー向上などを

業界全体で検討することが重要との意見も聞かれました。

▼説明資料や議事録は日本銀行ホームページに掲載しております。



(注1) 主として分散型台帳技術を用いたシステム上で発行・管理される電子的な証券。

(注2) 証券会社が運営するシステムを使用して取引所に取引できる私設取引システム。PTSは Proprietary Trading System の略。

(注3) 中央集権の管理者が存在しない、分散型取引所。DEXは、Decentralized Exchange の略。

「第一六回 日銀グランプリ 〜キャンパスからの提言〜」 の決勝大会を開催

▼大学生を主な対象とする金融・経済分野の小論文・プレゼンテーションのコンテスト「第一六回 日銀グランプリ〜キャンパスからの提言〜」に、今回は全国各地の四三校から一二編の論文が寄せられ、一次審査を通過した五チームにより

二〇二〇年十二月十九日に決勝大会が開催されました。新型コロナウイルス感染症の影響により、今回は本店内の複数の会場および京都支店をリモート接続する形で実施しました。

大会が開催されました。新型コロナウイルス感染症の影響により、今回は本店内の複数の会場および京都支店をリモート接続する形で実施しました。

▼決勝大会では、市川晃氏（経済同友会副代表幹事、住友林業株式会社代表取締役会長）、田代桂子氏（株式会社大和証券グループ本社取締役兼執行役員社長）の他、日本銀行の若田部昌澄副総裁（審査員長）、櫻井眞・政井貴子両政策委員会審議委員



最優秀賞の同志社大学政策学部チーム（写真撮影時のみマスクを外しています）

編集後記

■ 「にちぎん」春号をお届けします。地域の底力では、宮城県南三陸町の歩み取材しました。震災をバネにカキの養殖や杉などで、環境を意識したビジネスの転換が進んでいます。そうした転換には、個人の利害を超えた関係者の決意と協力が不可欠です。持続可能な町を目指して続く果敢なチャレンジ。庁舎の屋上で津波のなか生き残られた佐藤町長の強い思いが、町の皆さまに共有されているように感じます。

対談では、シンクタンクで先輩・後輩として机を並べていた森永卓郎氏と片岡剛士審議委員に存分にお話しただきました。森永氏の博識と独自の発想が大変興味深く満喫できます。私も自分の生き方を模索したくなりました。

インタビューでは、ビジネスの世界にAI人材を多数輩出されている東京大学大学院・松尾豊教授に、研究の原点、今のAIはどこがどのようにすごいのか、AIは人間を超えるのか、わかりやすく語っていただきました。最後に研究室の方向性を伺い、NHK大河ドラマ『花燃ゆ』での吉田松陰の印象的なせりふを思い出しました。「君の志はなんですか」 (林)

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。

(https://www.boj.or.jp/announcements/koho_nichigin/index.htm/)

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ (<https://www.boj.or.jp/>) をご覧ください。

にちぎん 2021年春号
編集・発行人 林 新一郎
発行 日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町 2-1-1
☎ 03-3277-2405



デザイン 株式会社市川事務所
印刷 文唱堂印刷株式会社
禁無断転載

の五名の審査員を前に、各チームとも堂々とプレゼンテーションと質疑応答を行いました。

▼最優秀賞には、同志社大学政策学部チームの「空き家REITで空き家をがらリート」空き家問題解決しなあきやへんで！」が選ばれました。この他、優秀賞に東京大学・一橋大学合同チーム、明治大学商学部チーム、敢闘賞に東京経済大学経済

学部・経営学部チーム、麗澤大学経済学部チームが選出されました。

▼日本銀行ホームページでは、決勝参加チームの作品全文と審査員講評および奨励賞論文の要旨、決勝大会の様相を収録した動画を掲載しています。



新卒採用エントリーシート の募集開始

▼日本銀行は、三月一日から新卒採用(総合職、特定職、一般職)のエントリーシートの募集を開始しました。詳細は、日本銀行ホームページをご覧ください。



広報誌「にちぎん」の ウェブアンケートを 開始しました

▼本誌「にちぎん」のアンケートを、インターネット上からお寄せいただけるようになりました。ぜひ、皆さまのご意見・ご感想をお寄せください。





from Frankfurt

ベルリン空港物語

2020年11月8日、「ベルリン・テーゲル空港」が70年以上の役目を終えて閉鎖しました。この空港は東西冷戦下の1948年にソ連によるベルリン封鎖によって陸の孤島となった当時の西ベルリンに対して西側諸国が支援物資を送るため、わずかに数週間の突貫工事で建設されます。当初は軍需中心でしたが、1960年の民間機の定期就航開始以降は、西ベルリンの人々にとって西側とつながる数少ない玄関口の役割を果たしてきました。1990年に東西ドイツが統一され、ベルリンが新たな首都となってからは、ドイツの首都の玄関口として活躍します。特徴的な六角形のデザインに加え、ベルリン中心街から約11kmという利便性の良さもあり、長年多くの人々に愛されてきました。

もっとも、首都の空港としては手狭だったこともあり、統一後、新たに「ベルリン・ブランデンブルク国際空港」の建設が始まります。この空港は、当初計画では2011年に開港予定だったのですが、工事不良な

どから計画が遅れに遅れ、2020年10月末ようやく開港にこぎつけました。

こうして役目を終えたテーゲル空港は、この約1週間後に惜しまれつつ閉鎖したわけですが、ベルリン市のミュラー市長がスピーチでいささか感傷的に「テーゲルはわれわれベルリン人にとって、まさに世界への玄関口だった」と述べるように、その長い歴史の中で、数多くの人々の物語を見つめてきました。

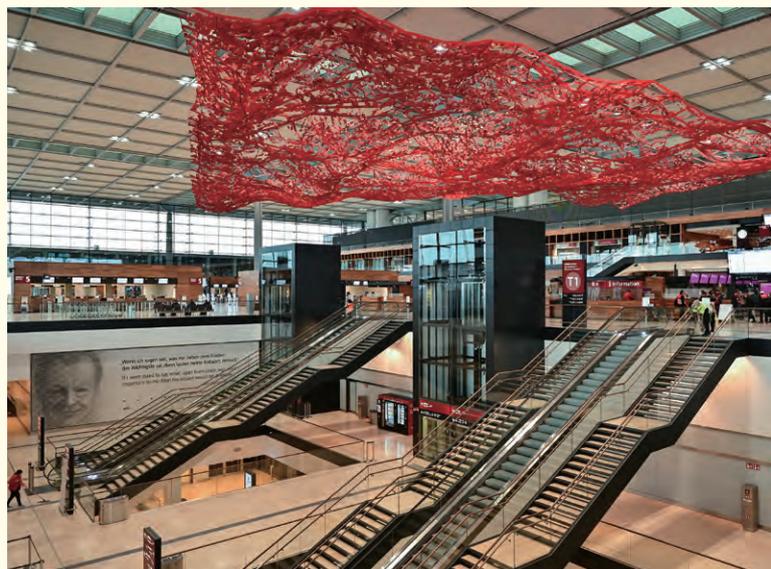
残念なことに新型コロナウイルスの感染拡大と重なったため、新空港の門出は派手なセレモニーのない寂しいものとなってしまいました。しかし、東西統一からちょうど30周年という節目にオープンすることとなった新空港は、躍動するドイツの首都の新たな玄関口として、これからますます多くの人々を迎え入れ、送り出し、そして新たな物語を紡ぐことでしょう。

(日本銀行フランクフルト事務所)

*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。



特徴的な六角形のデザインのベルリン・テーゲル空港
(写真提供：dpa-Zentralbild/DPA/ 共同通信イメージズ)



新たに開港したベルリン・ブランデンブルク国際空港
(写真提供：dpa-Zentralbild/DPA/ 共同通信イメージズ)



にちぎん